

鈴 鹿 市 郡 山 町
西高山 A・B 遺跡調査概要

1977.6

鈴 鹿 市 遺 跡 調 査 会

I 位置・地形

西高山A遺跡(6,000㎡)は、試掘調査時C₁地区と呼称したところである。後背の丘陵(30～35m)からの延長で、北にゆるやかに傾斜する台地で、北端には、巾(80～90m)の開析した谷がせまり、崖状をなしている。東西も、樹支状の細い谷がせまっている。発掘区中央部には、その一部が奥深く東側より入り込んでいる。台地とその谷との高低差は、発掘した地点で、約4.5mある。A遺跡の谷をへだてた西には追谷縄文遺跡が存在する。発掘前の現況は、台地の縁辺部には松林があり、他は、背の低い雑木であった。

試掘調査の結果、遺物、遺構が明らかにされたのは、発掘区中央部より東側に多く認められたので、本調査の範囲を一応この地域に限った。(FE地区―試掘坑P6～P21列より東側)。

B遺跡は、A遺跡から谷をはさんで、直ぐ東にある。A遺跡と同様に、浅い谷によって区切られた平坦な台地で、背の低い草木が繁茂している。試掘調査の結果、本遺跡群内で最も古い須恵器が出土しているため、業者との協議の結果、北半分は緑地保存することになり、南半分(約3,000㎡)を調査し、記録保存をすることになった。

台地を取り囲む樹支状の谷は、自然湧水が豊富で、今でも水田として利用されている。

Ⅱ 調査方法

調査の方法は、前回の西高山遺跡と同様、発掘区の端から、南北にアルファベット (A - E) , 東西に数字 (1 ~ 5) と、その組み合わせで、地区割を表わし、更に、その中を 4 m 四方の方眼で区切った。伐採から開始し、ブルドーザーを使用して、表土除去 (表土より約 15 ~ 20cm) を行ない、南東隅部から調査に着手した。

発掘区中央の谷の部分については、全面発掘することは不可能で、西側部分を若干、底部まで、掘り下げた。

昭和 50 年 12 月から発掘を開始した、西高山遺跡を西高山 C 遺跡と呼ぶことにした。

遺構番号を西高山 A 遺跡は 101 番より、B 遺跡は 200 番台、C 遺跡は、300 番台を与えることにした。

Ⅲ 遺 構

(1) 竪穴住居址

A 遺跡からは、竪穴住居址 26 基が見ついている。住居址の配置は、発掘区中央部、東側から入り込んだ谷を取りまく一群と、南東隅の一群とに分けることができる。前者は更に谷の北側の一群と南側のものとし、分けることが可能であるかも知れない。

谷の北側にあるものの多くは、北西から南東にゆるやかに傾斜する地山面をきってつくられている。南側のものも同様に、谷に向かってゆるやかに傾斜する面に設けられている。南東隅部のものは、ほぼ平坦面にある。

住居址全体に、旧地表から、床面まで浅く周溝のみで、住居址が区切られているものも多く、出土遺物は少ない。後世流されたものか、開墾等によって削られたものだろう。それを裏づける様に、谷底近くに、多数の土器片を見つけた。

竪穴住居址内の四本の主柱穴、周溝等は、ほとんど認められる。住居址の重複は、新しいものが、古いものより、面積が広がるもの (SB117, 118)、狭くなるもの (SB114, 115) とがある。谷をとりまく竪穴住居址は、出土遺物から、6 世紀後半のもの、7 世紀前半のものと大きく二時期に分類できる。南東隅部の住居址群の中からは、かえりを持つ須恵器の蓋が出土していることから、北側の住居址群よりも、若干新しいことが考えられる。

B 遺跡からは、四基見ついている。発掘区の北側に集中し、三基は、南側の傾斜地に向かって延びる排水溝を持っている。旧地表から、床面までは、約 15 ~ 20cm あり、A 遺跡の竪穴よりも深い。6 世紀初頭の古い須恵器が出土し、本遺跡群内で、最も古い竪穴住居址とすることができる。

(2) 掘立柱建物址

A 遺跡からは、15 棟見つかった。身舎のみの 3 × 2 間、4 × 2 間が中心となる。遺構の配置として、谷の北側部分、発掘区南東隅と大きく 2 つに分けることができる。南東隅のものについては、竪穴住居址よりも一段と高い所に位置し、更に、調査の経過より、かなり高い地点まで延びることが考えられる。2 × 2 間で、倉庫址と考えられる建物が居住用と考えられる建物とは、かけ離れた谷の南面、発掘区の東端部で、若干傾斜する地点に独立したようにみられる。建物の方向は、全体に東西棟から、どちらか少し振ったものが多い。SB109、1 棟だけが柱の掘り方が、ほかより大きく特異な存在で、棟方向が南北に近い。

B 遺跡では、竪穴住居址に近接して、多数の小柱穴（径 10 ～ 20cm）が見つかったが、建物址としては、まとまらなかった。試掘坑からは、建物址と考えられる柱穴も見つかっていて建物址の存在は当然考えられるが、地形、面積等から考えて、棟数は限られていたであろう。

II 掘立柱建物址の規模

S B	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	面積 (㎡)	備 考
102	6.6	5.3	N 88° E	35	柱穴大。炭化物を含む。 北側柱 1.5 m + 2.6 m + 1.5 m
107	7.0	4.6	N 65° E	32.2	
108	6.6	4.5	N 75° E	29.7	
109	5.7	4.2	N 18° W	23.9	
111	5.3	3.5	N 72° E	18.6	
113	4.2	3.2	N 10° W	13.4	
116	6.2	3.5	N 45° E	21.7	
122	3.5	3.0	N 18° E	10.5	
123	3.2	3.2	W - E	10.2	
124	4.0	4.0	N 80° E	17.6	
128	6.2	4.4	N 60° W	27.3	
129	5.4	3.4	N 55° W	18.4	
140	3.8	3.0	N 60° W	11.4	
141	3.5	2.8	N 65° E	9.8	
142	5.0	3.2	N 85° W	16	

(3) 土 壙

A 遺跡より、9か所見つかっている。3 m前後で、小規模なものが多い。発掘区南側のもの多くは、焼土、炭化物を多量に含み、出土遺物も多い。SK142より、紡錘車が出土している。

Ⅲ 土壙の規模

S K	形 状	規模 (m)	深さ (cm)	備考
143	楕 円	4.0 × 2.5	20	紡錘車, 焼土
144	円	2.5 × 2.0	15	
145	〃	3.0 × 2.0	12	
146	不正形	3.5 × 2.0	21	
147	長方形	4.5 × 1.0	20	
148	不正形	3.0 × 2.5	22	
149	〃	3.0 × 1.5	23	
150	円	2.5 × 2.0	15	

IV 結 語

昭和 50 年 12 月より発掘を開始した、西高山 C 遺跡も含め、約 15,000㎡を
発掘調査してきた。西高山、A、B、C 全遺跡をかえりみて、気づいた点をなら
べ、結語としたい。

(1) 河芸町と境をなす、調査区の南部には小支谷によって区切られ。大小の舌
状の台地が発達し、古くは縄文時代をはじめとし、古墳時代を中心とした、
すぐれた集落が存在する。とりわけ、古墳代後期（6 世紀後半～7 世紀前後）
の住居址が多数見ついていることから、この時期に爆発的に集落が増加した
ことを物語っている。また、その時代、開析した谷からの湧水を巧みに利用し
て 現在と同様、稲作を行っていたことだろう。

(2) 西高山 A 遺跡からは、竪穴住居址（26）、掘立柱建物址（15）が見つかってい
るが C 遺跡では竪穴住居址と、建物址の数は、逆転している。

B 遺跡からは、郡山遺跡の中で最も古い須恵器を伴う住居址が明らかにさ
れていることから、調査区の東端 B 遺跡から西側へ A → C 遺跡の集落の移動が
大雑把であるが考えられる。

(3) 竪穴住居址を検討してみると、本遺跡で比較的古い時期のものは、規模も比
較的にも大きく、プランも方形を呈し、周溝、支柱穴も容易に確認することができ
る。しかし時期が下るにつれて、長方形のプランのものが目立ってくるよう
である。炉も、どちらか一方の壁の中央部より少しずれたところに設けられて
いるものが多い。煙道については、6 世紀初頭ののものについては明らかではな
いが、6 世紀後半のものについては、ほとんど認められる。

建物も多数検出されたが、建物群として、方向、規画性は認められない。しかし
2 × 2 間で方形の倉庫址と考えられるものは、A 遺跡では、一カ所に集中して
存在していることが認められる。こうした傾向は、県下の古代の集落址に於い
ても明らかにされつつある。また全般的な建物の規模としては、2 × 3 間、2
× 4 間の身舎のもののみが中心となり、面積では 20㎡前後が多いようである。

(付図3)

また、竪穴住居址と建物址との先後関係は、例えば、A遺跡のSB101と、SB102、SB123とSB127より建物址の方が新しいことが判る。

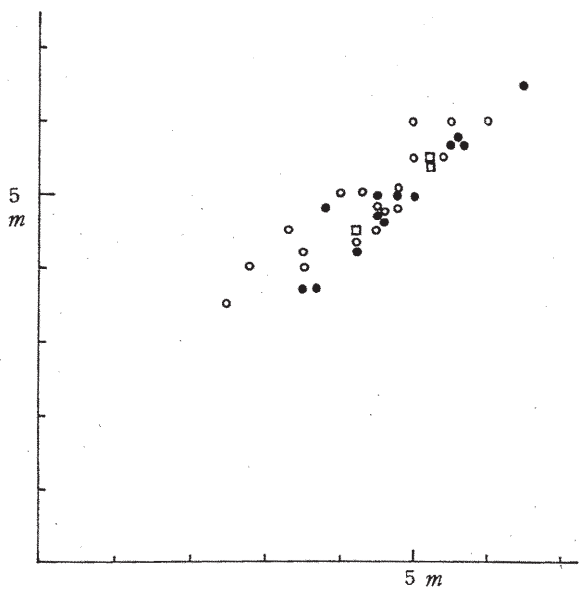
(4) 出土遺物は、ほとんどが、土器類である。なかでも、須恵器の杯、甕類が圧倒的に多く出土土器量の9割を占め、土師器は少量である。B遺跡だけは、例外で、土師器が多数を占めている。須恵器のなかには、焼生品、ゆがみのあるものも多数ある。また、特殊な遺物として、C遺跡から見つかった三点の硯は、周囲の歴史環境と照らし合わせて考えてみると非常に興味ある。その他、土錘、紡錘車が出土している。鉄製品として、刀子1点が、A遺跡の竪穴住居址から出土している。

(5) 現在、発掘中の末野B遺跡からも、多数の掘立柱建物址が検出されている。なかには意図的に柱筋をそろえた建物址も数棟あって西高山A、C遺跡とは、かなり様相を異にしている。各遺跡間、どのようなかかわりがあるのか、しいては、7世紀から8世紀に至る、古代農村の構造と言ったものが、今後の調査によって明らかにされることだろう。

	竪穴住居址	掘立柱建物址
西高山A	26	15
西高山B	4	0
西高山C	16	38

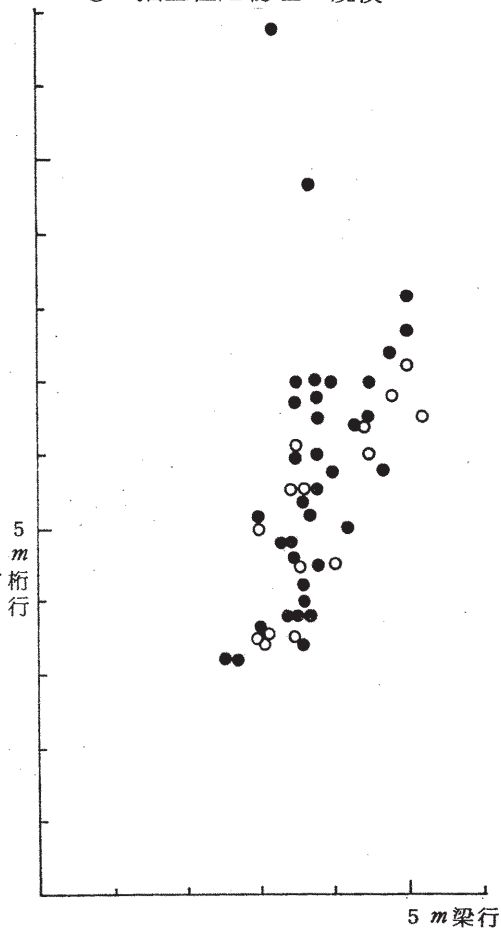
(文責 中森成行)

① 竪穴住居址の規模

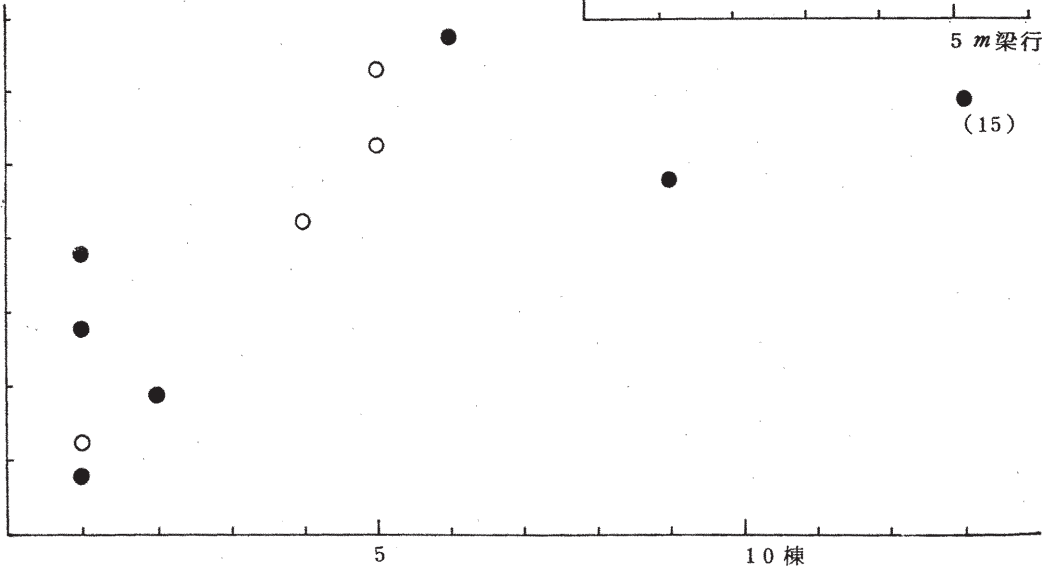


- 西高山 C
- // A
- // B

② 掘立柱建物址の規模

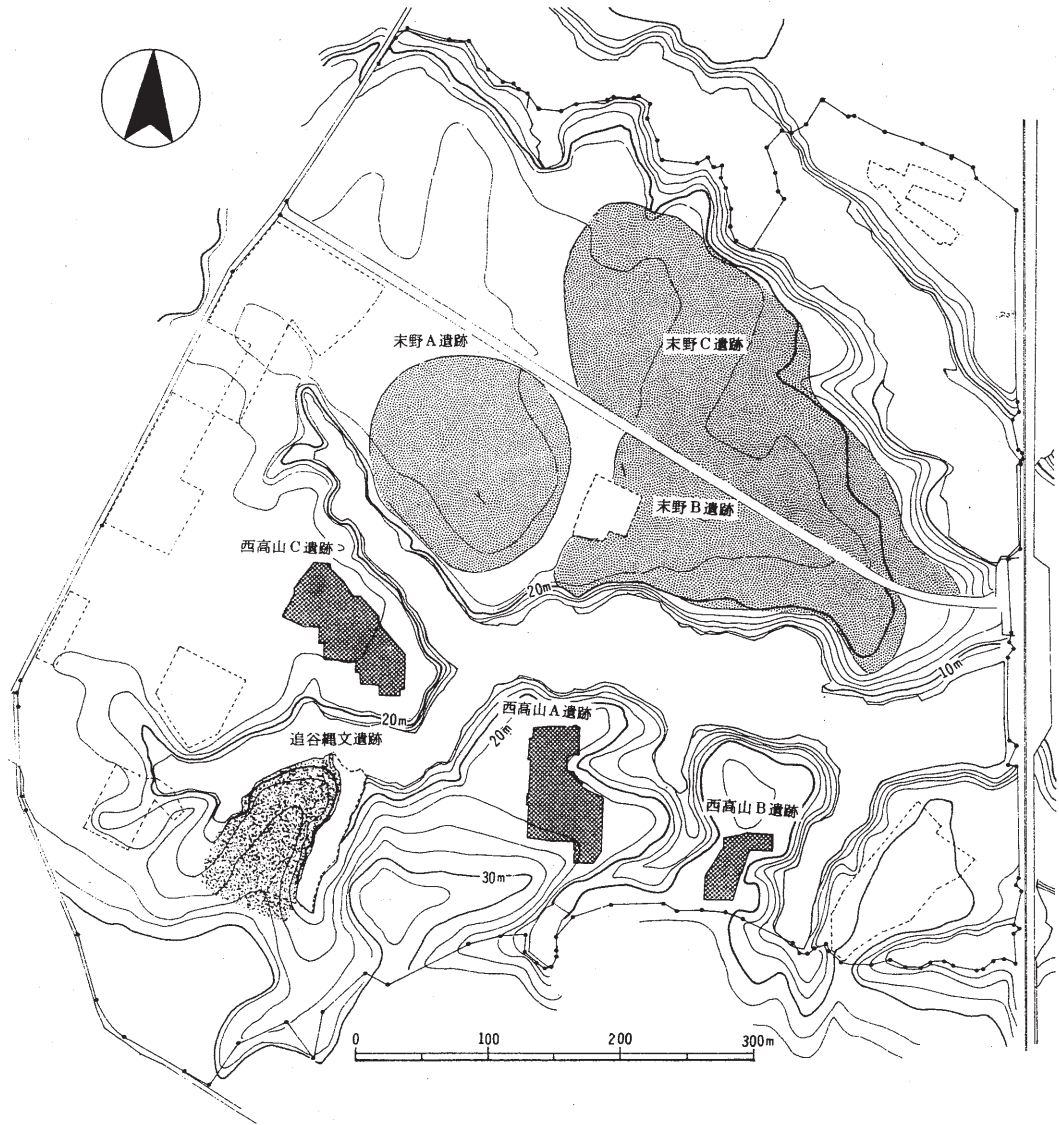


梁桁
2×2
2×3
2×4
2×5
3×3
3×4
3×5

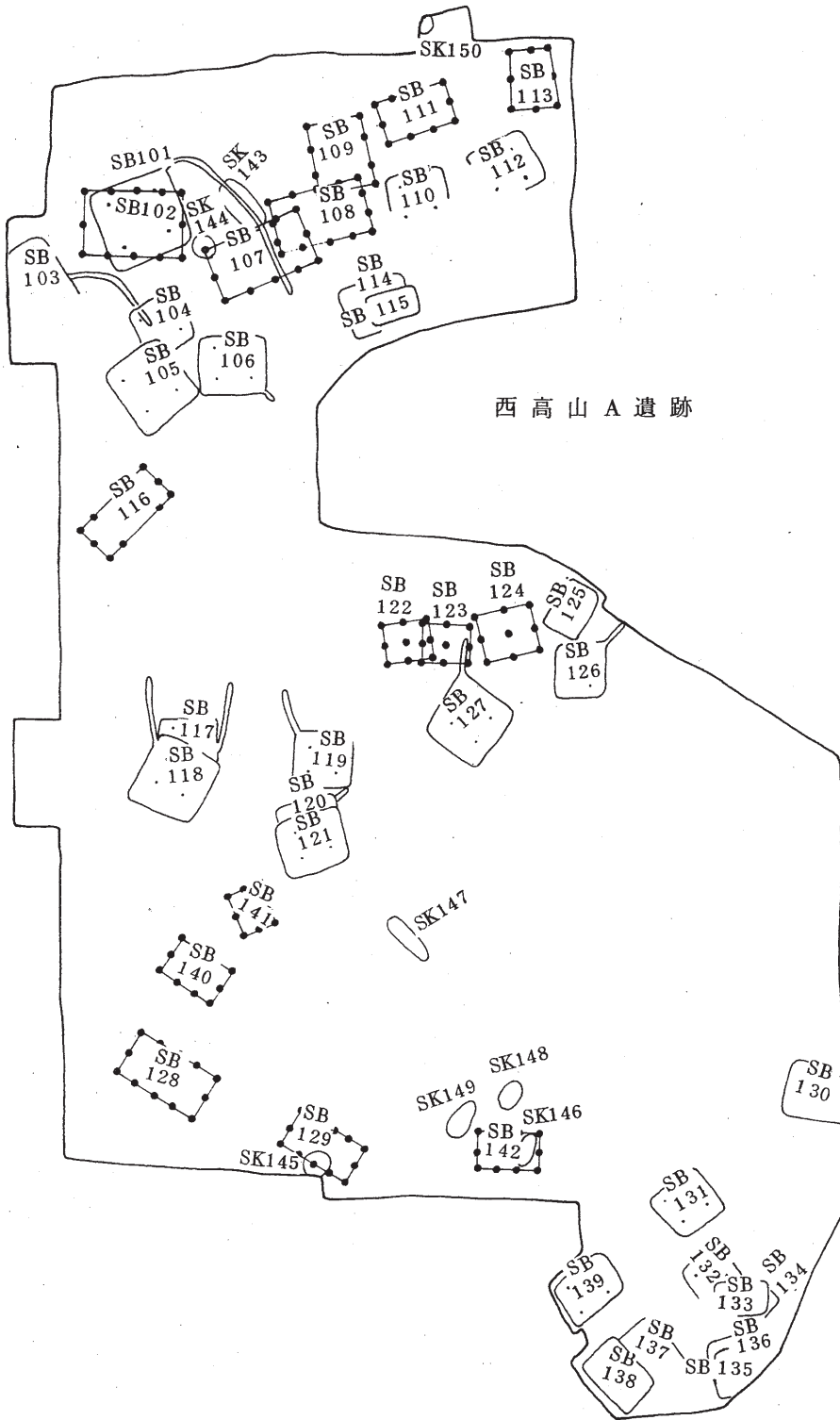


③ 掘立柱建物址の棟数

付図1 建物址の規模



付図2 郡山遺跡群地形図 (1 : 5, 000)

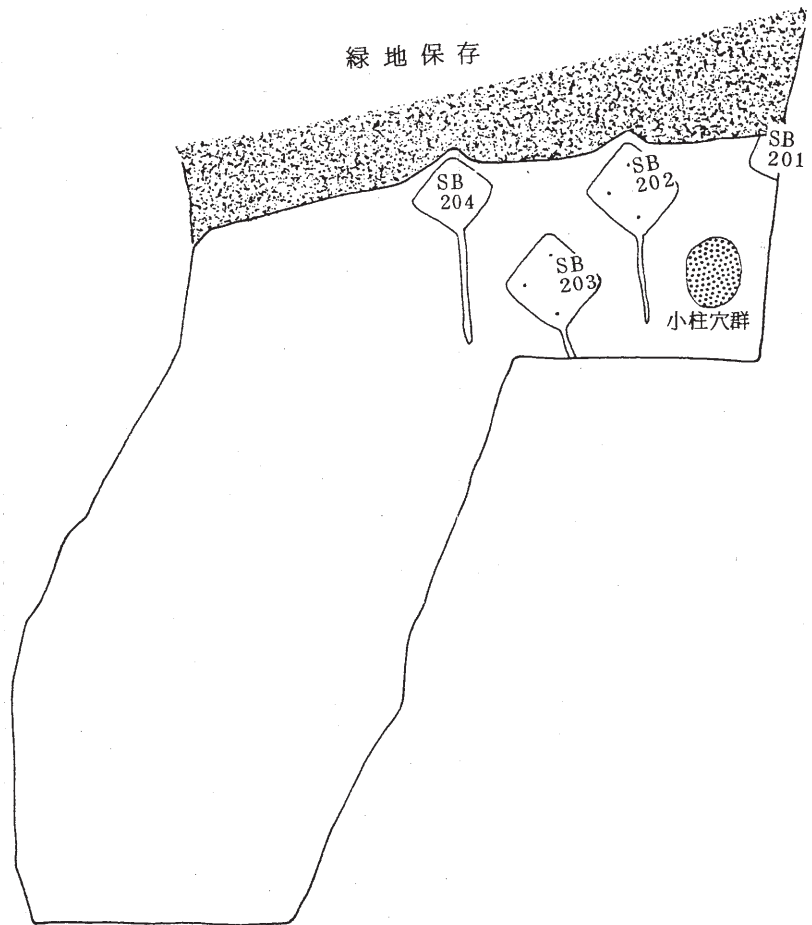


西高山 A 遺跡

付図3 遺構配置図 (1:500)



西高山 B 遺跡



付図 4 遺構配置図 (2) (1 : 500)